

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月18日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520470

研究課題名（和文） ボリビア日系・沖縄系移民社会における言語接触

研究課題名（英文） Language Contacts in Nikkei and Okinawan Communities of Bolivia

研究代表者

工藤 真由美 (KUDO MAYUMI)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：30186415

研究成果の概要（和文）：

ボリビア沖縄系移民社会（沖縄第1移住地）では、琉球語（沖縄中南部方言）、本土日本語、スペイン語とのダイナミックな言語接触が起こっている。談話録音については、世代ごと（1世成人移民、1世子供移民、2世、3世）に、文字化を行い、報告書『ボリビア沖縄系移民社会における談話録音資料』としてまとめた。沖縄県那覇市を中心とするウチナーヤマトゥグチ的な表現形式（～シヨッタ形式、～ワケサ等）も使用されていることが明らかになった。言語生活調査については、ブラジル沖縄系移民社会（サンパウロ市）と比較した結果、ブラジル（サンパウロ）では、ポルトガル語へのモノリンガル化が急速に進んでおり、ボリビアでは日本語が維持されるバイリンガルな状況にあることが多面的な調査項目から明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

In the Okinawan immigrant community of Bolivia (the first Okinawan settlement), there has been dynamic language contacts among the Ryukyuan language (the South-Central Okinawan dialect), the Japanese language and the Spanish language. The recorded conversations were put into text according to generation (adult immigrants and child immigrants of the 1st generation, the 2nd generation and the 3rd generation) and they were reported in “Conversation Data Recorded in an Okinawan Community of Bolivia”. The data showed us that the forms of “Uchina-yamatu-guchi” (“Okinawan-Yamato-language) such as ‘-siyotta’ and ‘-wake-sa’, are also in use in the communities. Regarding the investigation on language use, the multifaceted questionnaires have shed light on the fact that bilingualism, which also encourages the use of the Japanese language, has been maintained in Bolivia while monolingualism to the Portuguese language has been rapidly proceeded in Brazil.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：言語接触論、ウチナーヤマトゥグチ、コロニア語、移民社会、エスノグラフィー

## 1. 研究開始当初の背景

いわゆる「国語」として理念的に存在する日本語に対して、移民社会や多言語文化圏の中での「日本語」の実態に注目すべきことは、言語学のみならず文化人類学など人文系諸学における共通理解ともなっている状況である。しかしながら、こうした多様化された日本語についても、政治社会との関係では注目されるものの言語学的問題として総体的に把握されることは極めてまれであった。しかも南米における日系移民の日本語に至っては、多くの沖縄系移民を擁することから、琉球方言といった沖縄の言語を考慮する必要があるため、精緻な理論的枠組と憶断を排した実証的研究が大いに望まれているところであった。本研究はかかる状況から南米の、とりわけ日系・沖縄系両移民社会を最もパラレルに提示するボリビア移民社会における日本語の問題を、言語接触論 (Contact linguistics) の立場から、包括的に考察を試みようとするものである。

言語接触研究は、危機言語への関心とともに言語学における重要な分野を占めてきており、とりわけ欧米においては言語接触関係叢書が刊行されるなど、極めて国際的観点に立つ分野である。本研究は、こうした国際的潮流に合致するものであるのみならず、従来、国内外においてほとんど看過されてきた日系移民社会における言語接触到注目するとともに、ボリビア共和国サンタクルス県オキナワ村に代表される、琉球方言とスペイン語との言語接触、同国サンタクルス県サンファン村に代表される、標準語、西日本方言とスペイン語との言語接触という、言語学的にも重要な日本語のバリエーションの問題を総合的に俯瞰できるという点において、特筆すべき位置にある研究といえよう。さらに、ボリビア日系・沖縄系社会においても急速に同化が進んでおり、とりわけ日系一世の人口は激減の一途である。それゆえに、本研究は可及的速やかに実施しなければならない喫緊の課題として存在している。

また、本研究は研究代表者、共同研究者らが平成 14 (2002) 年度から数年間にわたり従事した、ブラジル日系・沖縄系移民社会における談話収録事業ならびに言語生活調査研究をもとに着想されたものであり、こうした言語生活調査の分析を通じて、日本語とポルトガル語、あるいはスペイン語のみといった単純で図式的な言語接触ではなく、沖縄系移民の言語である琉球方言や接触言語であるウチナーヤマトゥグチを観点に入れた、より

多層的な解析が必須であるとの認識に達したところに起因している。先の、ブラジル日系・沖縄系移民社会の言語生活調査研究は、従来の日本語研究の枠を超えるものとして、新たに移民社会という観点を導入したという点で大いに意義のあるものであったが、本研究はこうした研究の更なる発展を期すべく、極めて独創的かつ意外性のある着想によって、学術的貢献をなすものとして編成されたものと位置付けられる。

## 2. 研究の目的

ボリビアにおける日本人移民社会は、主として琉球政府による募集を淵源とする沖縄系移民社会と、日本政府による募集を淵源とする日系移民社会が、いわば対比される形で成立してきたという、極めて興味深い移民社会形成史を有している。しかしながら、そういった移民社会の特質をふまえた日系・沖縄系移民社会における日本語、さらにはスペイン語との言語接触といった言語のあり方について国内で言及された研究は皆無に等しい。それゆえに本研究では、最初に移民社会言語の実態把握を目的とする、言語生活項目を主とした言語接触調査を実施することで、単一的な日本語観に対峙する言語事実の実証を試みる。さらに、当該言語に関連する言語接触到関する文献調査を並行することにより、国内における言語接触研究の陥穽を補完することを目的としている。

また、シュハルトやワインライヒの所説を引くまでもなく、仮構的な言語の純粋性や言語間の切断性 (非連続性) という観点からは、かかる問題提起に対して何ら有効な枠組みを提供しない。それに比して近年の文法化理論では、言語内的のみならず言語接触到といった外的なものが引き起こす体系の再構築 (contact-induced grammaticalization) のプロセスの解明へと展開している。かかる観点から推し進められた Brian, D. J. and Janda, R. D. (eds.) 2003 *The Handbook of Historical Linguistics*. Blackwell. や、Heine, B. and T. Kuteva. 2005 *Language Contact and Grammatical Change*. Cambridge UP、また、Trudgill, P. (2004) *New-Dialect Formation: The Inevitability of Colonial Englishes*. Edinburgh University Press. といった諸研究は、今後の日本語学的研究の必須文献となるであろうし、本研究はその国内における先駆的な存在として、また国際的にも日本語における言語接触到という言語事実を広く内外に示すという意味において、極め

て意義を有するものと思われる。

また、本研究はとりわけ多言語文化圏を擁する欧米の言語学における言語接触の観点を重視し、特に沖縄系移民の言語接触については、日本国内における言語接触現象の典型例である沖縄の日本語バリエーションであるウチナーヤマトゥグチとの対比によって分析しようとする点も、極めて独創的であると言える。さらに、移民社会研究においては文化人類学的観点からの補強が必須であることから、サンパウロ大学をはじめとする研究機関との連携により、国際的かつ学際的研究としての要件を充足している。本研究により、日本語とスペイン語のみならず、標準語と琉球方言という幾層にもわたるボリビア日系・沖縄系移民社会の日本語という言語接触の実態が明らかになるものと思われる。

### 3. 研究の方法

(1) 沖縄における言語接触現象調査（研究分担者）として、ボリビア沖縄系移民社会の言語接触研究において極めて重要な意味をもつ、沖縄接触言語であるウチナーヤマトゥグチの言語資料を調査すべく、談話資料のみならず地域上限定的に刊行されている出版物等の書記言語の調査収集を行う。

(2) ボリビア沖縄系移民の言語接触調査（研究代表者・研究分担者）として、ボリビア共和国サンタクルス県オキナワ村の沖縄系コミュニティを対象に、そのコミュニティの形成過程を踏まえた上で、コミュニティの生活世界とそこでの言語的日常生活を描くエスノグラフィ的研究を、主として実地踏査を中心に行う。

(3) 言語接触研究文献調査（研究代表者）として、言語接触研究の中心機関のひとつであるドイツ連邦共和国チュービンゲン大学、ならびにハワイ大学付属図書館梶山季之文庫において、言語接触研究の最新成果ならびに研究上必須の文献資料について調査収集を行う。

ボリビア日系社会の言語研究に関して大いに示唆的であるドイツ系移民社会研究の状況を調査すべく、ドイツ連邦共和国国内大学の言語学関係講座所蔵の文献資料に関するレファランス作業を実施する。

(4) 言語接触研究文献調査（研究分担者）として、日本国内における言語接触研究に関する文献を、主として沖縄社会との関係において立体的把握すべく諸関連領域に拡充させながら、沖縄をはじめ日本国内の主要大学、研究所等の協力を得つつ調査収集を行う。

(5) ボリビアにおける言語接触文献調査（研究代表者・研究分担者）として、主にスペイン語・ポルトガル語によるものであったため日本国内での紹介が十分になされなかった、ボリビアにおける言語接触研究文

献について、南米における移民研究拠点の一つであるサンパウロ大学、ブラジル連邦共和国国内のサンパウロ人文科学研究所等の協力を得つつ調査収集を行う。

### 4. 研究成果

ボリビアにおける日本人移民社会は、主として琉球政府による募集を淵源とする沖縄系移民社会と、日本政府による募集を淵源とする日系移民社会が、いわば対比される形で成立してきたという、極めて興味深い移民社会形成史を有している。しかしながら、そういった移民社会の特質をふまえた日系・沖縄系移民社会における日本語、さらにはスペイン語との言語接触といった言語のあり方について国内で言及された研究は皆無に等しい。本研究は、ボリビア日系移民社会言語の実態を把握すべく、先に実施された、言語生活項目を主とした言語接触調査の分析を行うことで、単一的な日本語観に対峙する言語事実の実証を試みた。具体的には、南米ボリビアのオキナワ移住地における沖縄系移民のコミュニティを対象とし、日本語、沖縄方言、スペイン語による言語接触のありかたに関する記述を行った。オキナワ移住地は戦後の集団移民から成る農村型のコミュニティであり、1世では主に日本語と沖縄方言が使用されているが、2世以下では日本語とスペイン語の併用へと使用コードが変化している。また、このうち世代を問わず使われている「日本語」だが、アスペクトとシヨッタ形式、可能形式、否定形式、「説明」のモダリティに関わる形式、シテカラ形式といった諸点において、移住地の「日本語」には標準的な「日本語」には見られないような特徴が見られた。これらのことから、移住地の日本語が現在の沖縄のウチナーヤマトゥグチに似た特徴を示す場合があることが、本研究によって示された。また付随して、日本国内における言語接触研究に関する文献を、主として沖縄社会との関係において立体的把握すべく諸関連領域に拡充させながら、沖縄をはじめ日本国内の主要大学、研究所等の協力を得つつ調査収集を行うとともに、ボリビアにおける言語接触研究文献について、南米における移民研究拠点の一つであるサンパウロ大学、ブラジル国内のサンパウロ人文科学研究所等の協力を得つつ調査収集を行った。

次年度については、ボリビア日系移民社会言語の実態を把握すべく、先に実施された言語生活項目を主とした言語接触調査の分析を行うことで、単一的な日本語観に対峙する言語事実の実証を試みた。具体的には、南米ボリビアのオキナワ移住地における沖縄系移民のコミュニティを対象とし、日本語、沖縄方言、スペイン語による言語接触のあり方に関する記述を行った。さらに、オキナワ移

住地と対比させる形で、森幸一サンパウロ大学教授の協力のもと、ブラジル連邦共和国・サンパウロ市ビラカロン地区の沖縄日系移民コミュニティにおける言語生活調査のフォローアップも実施した。結果として、沖縄日系移民社会における言語意識の問題を示すものとして、沖縄方言保持運動の一環である「ウウチナーグチ講座」が、サンパウロ市ビラカロン地区で開講されている実態が明らかになった。また、昨年度と同様に、日本国内における言語接触研究に関する文献を、主として沖縄社会との関係において立体的把握すべく諸関連領域に拡充させながら、沖縄をはじめ日本国内の主要大学、研究所等の協力を得つつ調査収集を行うとともに、ボリビアにおける言語接触研究文献について、南米における移民研究拠点の一つであるサンパウロ大学、ブラジル国内のサンパウロ人文科学研究所等の協力を得つつ調査収集を行った。

最終年度は、ボリビア日系移民社会言語の実態を把握すべく、先に実施された言語生活項目を主とした言語接触調査の分析を行うことで、単一的な日本語観に対峙する言語事実の実証を試みた。具体的には、南米ボリビアのオキナワ移住地における沖縄系移民のコミュニティを対象とし、日本語、沖縄方言、スペイン語による言語接触のあり方に関する記述を行った。さらに、オキナワ移住地と対比させる形で、森幸一サンパウロ大学教授の協力のもと、ブラジル連邦共和国・サンパウロ市ビラカロン地区の沖縄日系移民コミュニティにおける言語生活調査のフォローアップも実施した。また本年度も、また付随して、日本国内における言語接触研究に関する文献を、主として沖縄社会との関係において立体的把握すべく諸関連領域に拡充させながら、沖縄をはじめ日本国内の主要大学、研究所等の協力を得つつ調査収集を行うとともに、ボリビアにおける言語接触研究文献について、南米における移民研究拠点の一つであるサンパウロ大学、ブラジル国内のサンパウロ人文科学研究所等の協力を得つつ調査収集を行った。

本研究は、当初の研究計画に従い、言語接触に関わる言語生活調査並びに談話収録について、サンパウロ大学の協力の下、順次着手された。さらに、本研究において収集されたデータについては、概要を報告書としてまとめられるとともに、今後のフォローアップ調査実施に関する協力体制整備を企図した情報交換を綿密に行うことにより、本研究はおおむね順調に進展したものと位置付けられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 工藤真由美、時間的限定性について、日本研究、51、4-73頁、2012年、査読有
- ② 白岩宏行・森田耕平・朴秀娟・斉藤美穂・森幸一・工藤真由美、ブラジルとボリビアにおける沖縄系エスニックコミュニティと日本語、阪大日本語研究、23、1-36頁、2011年、査読有
- ③ 工藤真由美・白岩宏行、ボリビア・沖縄系移民社会における日本語の実態、日本語学(明治書院)、29-6、4-16頁、2010年、査読無
- ④ 山東 功、調べるときの舞台裏、日本語学(明治書院)、29-2、4-12頁、2010年、査読無
- ⑤ 白岩広行・森田耕平・王子田笑子・工藤真由美、ボリビアのオキナワ移住地における言語接触、阪大日本語研究、22、11-41頁、2010年、査読有

〔学会発表〕(計2件)

- ① 工藤真由美、時間的限定性という観点から提起するもの、韓国外国語大学日本研究所国際シンポジウム、2011.8.19、韓国・韓国外国語大学
- ② 工藤真由美、方言の多様性からみた日本語、人間文化研究機構シンポジウム、2009.12.5、有楽町朝日ホール(東京都)

〔図書〕(計4件)

- ① 影山太郎・工藤真由美、他(共著)、くろしお出版、属性叙述の世界、2012年、143-176頁
- ② Junji Koizumi・Mayumi Kudo(eds.)、Osaka University Global COE Program, A Research Base for Conflict Studies in the Humanities、Conflict Studies in the Humanities Special Issue Migration and Identities: Conflict and the New Horizon、2011年、240頁。
- ③ 上野善道・工藤真由美、他(共著)、明治書院、日本語研究の12章、2010年、516頁
- ④ 工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵、ひつじ書房、ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触、2009年、444頁

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

工藤 真由美 (KUDO MAYUMI)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：30186415

##### (2) 研究分担者

山東 功 (SANTO ISAO)  
大阪府立大学・21世紀科学研究機構・教授  
研究者番号：10326241